

# 「オペ室の悪魔」

— 1 稿 —

2026/02/25  
山極 瞭一朗

〈人物表〉

若井 中也

(31)

医師

村田 啓一

(47)

若井の先輩医師

猪狩 仁朔

(76)

患者

藁科 権太

(67)

病院長

女1・2

男1・2

少年・少女

看護師

1. 4番手術室（夜）

薄暗い室内。

医療用機材が雑に設置されている。

女1の声 「オペ室の悪魔って知ってる？」

男1の声 「ずっと使われてないオペ室があつて」

手術台に無数の紙が貼りつけられている。

女2の声 「殺したい医者の名前を書くと、悪魔がそいつを殺してくれる」

少年の声 「お医者さんだけ？」

紙には、『〇〇先生殺して』『××死ぬ』などの文言。

男2の声 「恨みを買っている医者は多い」

男1の声 「医療ミス、医療過誤」

少女の声 「人を殺してるんだね」

少年の声 「本当に死ぬの？」

紙の中には、朱でバツ印がついているものもある。

女1の声 「悪魔に呪われたら最後。逃れることはできない」

少女の声 「理不尽だ」

女2の声 「世の中は理不尽だらけだよ」

ちかちかと照明が明滅する。

2. 1番手術室（昼）

手術中。

村田啓一（47）、執刀している。

若井中也（31）は第一助手として村田のサポートに徹している。

村田、手を動かしながら、

村田 「アメリカは楽しみか」

若井 「不安もありますが」

村田 「ったく、淋しくなるな」

若井 「先生にはお世話になりました」

村田 「若井、何度も言わせるな。俺は何もしていない」

若井 「そんなことはありません。俺なんて……」

村田、ニヤリと若井を一瞥して、

村田 「自信のなきはいつになったら治る？」

若井 「すみません」

村田 「ま、謙虚なのはいいことだ」

若井、村田を一瞥して、苦笑。

2階の見学室では、藁科権太（67）が席に座り、  
動静を見守っている。

すると、村田が唐突にメスを握る手を止める。

藁科、異変に気付き、眉をひそめる。

若井 「先生？」

村田、心ここにあらずといった様子で、若井の先を  
凝視しており、その手は震えている。

若井 「先生、どうしました？」

若井、訝しそうに振り返る。

が、そこには何も無い。

と、村田の手からメスが落ちる。

咄嗟に村田を見る若井。

藁科、徐に立ち上がる。

村田 「ま、待て……待ってくれ」

若井 「先生……？」

村田、首を左右に振ると、ひどく慌てて出ていく。

若井 「先生」

直後、心電図モニターからアラート発生。

若井、咄嗟にモニターを見る。

看護師 「若井先生」

若井、村田を気にしながら、執刀側に回り、

若井 「私が変わります」

床に落ちたメス。

### 3.

#### 病院・屋上（夕）

雨が降っている。

びしょ濡れの村田、怯えながら後ずさる。

村田 「やめろ、やめてくれ……」

村田、柵に衝突。さっと下を覗く。

逃げ場はない。

村田 「頼む、お願いだ……」  
柵をぎゅっと握る。

村田 「お、俺は何してっつい——」

と、足がひょいと浮き、一回転。そのまま落下する。

4. 4番手術室（夕）

手術台に、『村田啓一を殺せ』の紙。朱でバツ印が  
つけられている。

5. 病院・外観（夜）

雨が降りしきる。

6. 病院・院長室（夜）

藁科、どかっと腰を下ろす。

若井、藁科の前で直立不動。

藁科、ふーと息を吐き出して、

藁科 「……自殺だ」

若井 「自殺、ですか」

藁科 「事件性はなし。警察は早々に帰宅なされた」

若井 「そんな……」

藁科 「君が彼を師と仰いでいたのは知っている」

若井 「……」

藁科 「彼には心の内で抱えていたものがあつた。手術を投げ出  
すくらい大きな闇」

若井 「待ってくだ——」

藁科、手で若井の言葉を制して、

藁科 「わかつている。私も信じられない」

若井 「先生は何かに怯えていました」

藁科 「何かとは？」

若井 「院長も見ていましたよね」

藁科 「あの場には君たち以外いなかった」

若井 「ありません」

藁科 「怯えていたのではなく、堪えきれなかった、何かの重責  
にね」

若井 「先生にはきつと何かが見えていたんです」  
藁科 「若井君。気持ちはわかる。だが渡米も近い。忘れろとは

言わんが——」

若井 「オペ室の悪魔」

藁科、ピクッと頬を歪める。

若井 「先生はオペ室の悪魔に怯えていた」

藁科、ふっと笑みをこぼして、

藁科 「都市伝説だろう」

若井 「4番手術室に入ったことはありませんか？」

藁科 「誰も入れない」

若井 「院長も入れないんですか」

藁科 「先代があの手術室に鍵をかけたのち、二度と開けられぬ  
よう鍵を破壊した」

若井 「破壊？」

藁科 「そうだ」

若井 「何故です？」

藁科 「何故？」

若井 「オペ室の悪魔が都市伝説ではないから、ではないですか  
？」

藁科 「調べてみるか？」

若井 「はい？」

藁科 「それほど気になるなら、行ってみるといい。入れないと  
しても手掛かりはあるかもしれない」

若井、ごくりと唾を呑み込む。

## 7. 病院・廊下（夜）

若井、懐中電灯片手に歩いている。

向こうから、猪狩仁朔（76）が覚束ない足取りで  
歩いてくる。

若井、気付いて駆け寄り、

若井 「猪狩さん？」

猪狩、ハツとして立ち止まる。

若井 「消灯時間過ぎてますよ」

猪狩 「せ、先生」

と、勢いよく若井の肩を掴んで、

猪狩 「いたんじゃ」

若井 「はい？」

猪狩 「妻がいたんじゃ」

若井 「猪狩さん」

猪狩 「ずっと会いたかった。まさか、まさかこんなところに」

若井、諭すように、

若井 「猪狩さん、奥様は亡くなられて——」

猪狩 「いや、あれは妻だった。だが、どこかへ行っちゃった」

若井 「きっと見間違いで——」

猪狩 「先生、探してきてくれないか」

と、若井の手をぎゅっと握る。

若井、困惑気味に、

若井 「……わかりました」

猪狩 「さすが先生」

若井、すっと猪狩の手を離して、

若井 「ひとまず猪狩さん、もう遅いですから、病室戻りましょ

う」

猪狩 「見つけたら教えてもらえるか」

若井、ひとつ頷く。

猪狩、軽い足取りで向こうに歩いていく。

若井、猪狩の背を漠然と見つめている。

× × ×

4番手術室の前。

扉には、規制線のテープやお札が乱雑に貼り付けられてる。落書きもあり、そこだけ異様な空間。

若井、部屋の前に立つ。

が、自動扉は開かない。

若井、手動で開けようとするが、ビクともしない。

刹那、一陣の風が吹き抜ける。

若井、ビクッとして振り返る。

何もない。

と、自動扉が開く。

若井、思わず懐中電灯を落とす。

8. 4番手術室(夜)

照明が明滅している。

若井、恐る恐る入る。そして手術台の前に立つ。

『村田啓一を殺せ』の紙。朱でバツ印。

若井、ごくりと息を呑んで、

若井 「これ……」

と、紙を手取る。

その拍子に別の紙が床に落ちる。

若井、拾って見ると、目を大きく見開いて、

若井 「嘘だろ……」

『若井中也死ね』の文言。

(おわり)